

(17) セルリー

主要病害虫別防除方法

病害虫名 (病原体)	農薬によらない防除	農薬による防除
軟腐病 (細菌)	<p>①イネ科またはマメ科植物との3～4年の輪作をする。</p> <p>②多湿条件で発病が助長されるので、地表はマルチする。</p> <p>③密植、窒素の多施用を避け、適切な栽培管理を行う。</p> <p>④トンネルや、ハウスを利用した雨よけ、風よけ栽培を行う。</p> <p>⑤ハウス栽培では、日中の換気に注意するとともに、通路などに敷わらをして土壌の飛散を防ぐ。</p> <p>【参考事項】 アブラナ科をはじめ、イネ科を除くほとんどの作物を侵す。侵入部位は、主に作業時にできた傷や、昆虫の食害による傷である。栽培終了後は、被害組織の一部は土中に残り、病原細菌は再び腐生生活を営み次作の伝染源となる。生育適温は30～35℃と高く、多湿条件下でよく増殖する。伝染は主に水を介して行われる。降雨による土壌の飛散にともなって、地上部の茎葉に病原菌が運ばれ、また病斑部から飛散した水滴の一部は、強風下でエアゾルとなって病原菌を運ぶ。主に露地栽培での発生が多く、夏から秋にかけての長雨、台風により多発することが多い。秋が暖かい年は発生の多い傾向がある。</p>	<p>①予防散布をする。 栽培初期から予防に重点をおいた防除対策をとる。発病をみたら、ただちに株元に十分かかるように散布し、他の株への伝染を防ぐ。 長雨や激しい風雨が予想される場合には、降雨前後に防除する。</p> <p>(例) オキシリニック酸水和剤（スターナ水和剤） ノニルフェノールスルホン酸銅水和剤（ヨネボン水和剤）</p>
葉枯病 (<i>Septoria</i>)	<p>①種子伝染防止のため、48℃、30分間の温湯消毒をする。(野菜の種子消毒の項参照)</p> <p>②排水を良好にする。</p> <p>③発病茎葉を処分する。</p> <p>④連作を避ける。</p> <p>⑤ハウスやトンネルにより雨よけをすと、発病回避効果が高い。</p> <p>【参考事項】 菌糸または柄子殻（柄孢子）のまま、被害植物、とくに種子で越冬する。柄子殻から溢出した柄孢子は、適温、多湿条件下で発芽し、感染、発病する。生育適温は16～21℃で、死滅温度は48～49℃である。病斑部には、古くなると中心部に小黒点状の柄子殻ができる。柄子殻は成熟して雨水に遭うと、頂上部の小孔から柄孢子を盛んに放出して、二次伝染が起こる。露地栽培では、降雨によって柄孢子が飛散し激しく発病する。</p>	登録農薬はない。
斑点病 (<i>Cercospora</i>)	<p>①種子伝染防止のため、48℃、30分間の温湯消毒を行う。(野菜の種子消毒の項参照)</p> <p>②窒素肥料は、多すぎないように施用し、バランスのとれた肥培管理を行う。</p> <p>③被害植物残さがほ場に残らないように除去する。</p> <p>④連作を避け、2～3年は他の作物を栽培する。</p> <p>⑤ハウスやトンネルにより雨よけをすと、発病回避効果が高い。</p> <p>【参考事項】 ミツバ、パセリも侵す。菌糸塊により、種子または被害植物について越冬し、第一次伝染源となる。病斑上には、分生胞子のみを形成し、高温多湿条件下では、表面に白いカビとして見える。雨水により分生胞子が脱落して、二次伝染する。トンネルやハウスによる雨よけ栽培では、雨滴の飛散がほとんどなく、発生は少ない。露地栽培では、降雨が続くと分生胞子の飛散によって激しく発病する。資材類は、カルシウムハイポクロライト剤（ケミクロンG）で消毒する。</p>	<p>①予防及び発病初期から農薬を散布する。 発生が見られる6月の初めから注意し、病斑が散見され始めたら直ちに散布する。 露地栽培では、梅雨期から発生が多くなるので、降雨が続き多発が予想される場合には、1週間ごとに数回散布する。</p> <p>(例) アゾキシストロビン水和剤（アミスター20フロアブル） クレソキシムメチル水和剤（ストロビーフロアブル） ジフェノコナゾール水和剤（スコア顆粒水和剤） TPN水和剤（ダコニール1000）</p>
萎黄病 (<i>Fusarium</i>)	<p>①連作を避ける。</p> <p>②育苗は無病土を用い、育苗箱、プラグ、鉢などで行う。育苗中はこれらが地面に接しないよう、すのこなどの上で管理する。</p> <p>③太陽熱又は蒸気で土壌消毒を行う。</p> <p>④暑い時期の栽培を避ける</p> <p>⑤発病株の残さは、ほ場から持ち出し処分する。</p> <p>【参考事項】 病原菌は、厚壁胞子の形で被害植物または土壌中で長期間生存し、土壌伝染する。セルリーのほかにパセリにも強い病原性を示す。発病適温は27～30℃であり、気温の下がる10～3月は感染しないか、感染しても発病が抑制される。軟腐病とは、維管束の褐変が明瞭で葉柄最先端にまで及ぶこと、悪臭を発しないことなどで区別できるが、混発している事例もある。</p>	<p>①土壌消毒を行う。</p> <p>(例) クロルピクリンくん蒸剤（クロールピクリンなど） ダゾメット粉粒剤（ガスタード微粒剤、バスアミド微粒剤）</p>

病害虫名 (病原体)	農薬によらない防除	農薬による防除
アブラムシ類	<p>①施設の開口部は目合い1mm以下の防虫ネットを展張する。</p> <p>②ほ場周辺の寄生作物の除去、寄主となる作物の防除を行う。</p> <p>【参考事項】 モモアカアブラムシ、ニンジンアブラムシ、ワタアブラムシなどが寄生する。 モモアカアブラムシなど主要種は、他の寄主で越冬し、2～3世代発生を繰り返した後に飛来する。 アブラムシ類は薬剤抵抗性が発達しやすいので異なる系統を組み合わせたローテーション防除を行う。 アブラムシ類はモザイク病を媒介する。</p>	<p>①定植時に粒剤の土壌処理を行う。 (例) アセタミプリド粒剤 (モスピラン粒剤)</p> <p>②施設では発生初期に天敵製剤を利用する (天敵製剤の項参照)。</p> <p>③無翅虫の発生を確認したら防除を開始する。 寄生部の葉裏に十分に薬液がかかるように散布する。 (例) イミダクロプリド水和剤 (アドマイヤーフロアブル) ジノテフラン水溶剤 (スタークル顆粒水溶剤、アルバリン顆粒水溶剤) ヒドロキシプロピル化リリン酸架橋ゲンデン液剤 (粘着くん液剤)</p>
ハモグリバエ類	<p>①施設の開口部は、目合い0.8mm以下の防虫ネットを展張する。</p> <p>②ほ場周辺の寄生植物の除去、寄主となる作物の防除を行う。</p> <p>③ほ場全体をビニルで覆い、太陽熱で地上の蛹を殺してから定植する。</p> <p>【参考事項】 ナモグリバエとマメハモグリバエの寄生が多い。このうち、マメハモグリバエはセリ科をはじめ、キク科、マメ科、ナス科、アブラナ科、ウリ科など多くの植物に寄生する。 幼虫は、3齢を経て蛹化直前に葉外に脱出し、土壌表面などで蛹化する。 産卵から成虫羽化まで、25℃では約17日である。 施設では年中発生し、休眠はしない。</p>	<p>①定植時に粒剤の土壌処理を行う。 (例) チアメトキサム粒剤 (アクタラ粒剤5) (ナモグリバエ)</p> <p>②施設では発生初期に天敵製剤を利用する (天敵製剤の項参照)。</p> <p>③低密度時から農薬を散布する。 (例) エマメクチン安息香酸塩乳剤 (アフーム乳剤) シロマジン液剤 (トリガード液剤) (マメハモグリバエ) スピノサド水和剤 (スピノエース顆粒水和剤)</p>
ヨトウガ (ヨトウムシ)	<p>①管理作業中に卵塊や幼虫集団を見つけたら処分する。</p> <p>②施設の開口部には、目合い4mm以下の防虫ネットを展張する。</p> <p>【参考事項】 キャベツ、ハクサイ、ダイコン、花きなど多くの作物を加害する。 発生は年2回、4～5月と9～10月に発生が多い。 ふ化幼虫、若齢幼虫は葉裏に群生して加害する。被害部がスカシ状になるため、容易に発見できる。 終齢幼虫は日中地際部に潜み、夜間出てきて葉を食害し、土中で蛹化する。</p>	<p>①若齢幼虫期に農薬を散布する。 成虫の出現期を調査し、産卵期に入ったら定期的に防除する。 被害株が見られ始めたら、早めに防除を開始する。 中齢幼虫以降になると防除効果が著しく低下するので、若齢幼虫での防除に徹する。 葉裏に薬液が十分かかるように散布する。 (例) エマメクチン安息香酸塩乳剤 (アフーム乳剤) クロルフェナピル水和剤 (コテツフロアブル) BT水和剤 (エコマスターBTなど)</p>
ハスモンヨトウ	<p>①管理作業中に卵塊や幼虫集団を見つけたら処分する。</p> <p>②施設の開口部には、目合い4mm以下の防虫ネットを展張する。</p> <p>【参考事項】 ダイズ、キャベツ、ハクサイ、ダイコン、花きなど多くの作物を加害する。 発生は年数回で8月頃から増え始め、9～10月は特に多い。 ふ化幼虫、若齢幼虫は葉裏に群生して加害する。被害部がスカシ状になるため、容易に発見できる。 終齢幼虫は日中は地際部に潜み、夜間出てきて葉を食害し、土中で蛹化する。</p>	<p>①若齢幼虫期に農薬を散布する。 成虫の発生が続く場合は、定期的に農薬を散布する。 中齢幼虫以降になると防除効果が著しく低下するので、若齢幼虫での防除に徹する。 葉裏に薬液が十分かかるように散布する。 (例) エマメクチン安息香酸塩乳剤 (アフーム乳剤) フルフェノクスロン乳剤 (カスケード乳剤) スピネトラム水和剤 (ディアナSC)</p>